

国連アジア極東犯罪防止研修所 第164回国際研修に参加して

大阪地方検察庁 検察事務官 古川光弘

私は、平成28年8月16日から9月23日まで開催された標記研修に参加する光栄を得ました。この感想文を書いているのは、研修終了後1週間も経っていない時期であり、パソコンを打っていると、共に研修に参加した仲間の顔が次々と浮かび、涙を禁じ得ません。なかなか英語が出ずに焦る私に対し、「あなたが話すのを待っているから大丈夫。」と笑顔で言ってくれたモルディブの研修員。何とも楽しそうに、自国の歴史や文化について2時間も私に語ってくれたパプアニューギニアの研修員。研修最終日、涙ながらに「私はこの本から力をもらった。だからあなたにも、辛い時や悲しい時に読んでほしい。」と愛読書をくれた大韓民国のオブザーバー。私の拙く、かつ個人的な話に「共感できる。」と言ってくれたブラジルの研修員。男の私が惚れてしまうような「野郎ばかり」の日本人研修員。日本を含む19か国、31名のそれぞれの研修員と思い出があり、浮かんでは消える仲間の顔は、私を時に泣かせ、時に笑顔にしてくれます。私がこの感想文で伝えたいことは、感謝以外の何ものでもありません。

とは言っても、研修前、そして研修当初は、新しい仲間との出会いや、知識習得への期待よりも、不安や憂鬱の方が大きかったというのが正直な気持ちです。海外研修員が来所する前日、教官から「皆さんには、半分は研修員、ただ、もう半分はスタッフだと思って、一緒に盛り上げてもらいたい。」旨のお言葉を賜りました。翌日、「自分はスタッフ、お迎えする立場だ。」と意気込み新たに、海外研修員を迎えたのですが、緊張しながら発した私の英語が全く通じず、また、相手が発する英語の意味がほとんど分からず、困り顔の海外研修員を前に、「大変な研修に参加してしまった。」と思ったのが、つい昨日のこのことです。

研修員としては、主に、IP (Individual Presentation) と呼ばれるプレゼンテーション、講義の受講と施設見学、また、3つのグループに分かれての討議を行いました。今回の国際研修のテーマは「効果的な非行少年の処遇、更生及び社会復帰」であり、一見すると検察庁職員には縁遠いテーマでしたが、再犯防止は法務省を挙げての重要課題であり、各講義の内容や、各国のプレゼンテーション等は、検察事務官の私にとっても大変有意義なものでした。

グループ討議では、参加者全員に発言の機会があり、その意見に対して反対の意見を持っている研修員でさえも、その意見を尊重し、傾聴する態度に、何度心を打たれたか分かりません。研修前、「グループ討議は四分五裂、言いたいことだけ言ってまとまらないのではないか。」などと思っていた自分が恥ずかしくなりました。グループ討議で、私は副議長という分不相応な大役を頂いたの

ですが、いつも優しい眼差しを向けてくれ、ユーモアを忘れないコートジボワールの議長と、冷静沈着、理路整然、かつ情熱的な書記・副書記の3人、アイデア豊富で積極的なフランスのインターンを始めとする参加者の皆に頼るばかりでした。副議長と呼ぶに値するような仕事は十分にはできなかったのですが、グループ討議後の発表会で、私たちのグループの発表が終わった後、自然と涙が溢れてきました。法律も制度も宗教も文化も違う研修員たちが、お互いを尊重し合いながら、何時間も討議し合うという経験はめったにできるものではありません。その貴重な時間が終わってしまった寂しさと、メンバーへの感謝、そしてそれを支えてくれている方々への感謝が一気に溢れてきたのです。私の涙を見て、隣に座っていた海外研修員が、私の背中を優しくトントンと叩いてくれたことに、また私は泣いてしまいました。

講義・見学も素晴らしいものばかりでした。私の固定観念を根底から変えてくださった先生、熱い話で研修員の魂を揺さぶってくれた先生。特に、保護司の皆さんの情熱、滅私の精神は、驚きとともに研修員たちの心に深く刻まれました。施設見学では、児童自立支援施設のグラウンドで見た、少女たちが懸命に舞うソーラン節を私は一生忘れることができないと思います。そこに共通の言語は必要なく、ふと周りを見回せば、目を真っ赤にしている者、大喝采を送る者、感動・感謝という気持ちで私たち研修員は一つになることができました。

半分スタッフとしては、平日の研修後や休日に、海外研修員を様々な場所に案内したり、イベントを開催したりして、共通理解を深めることに努めました。花火大会や阿波踊り大会の観覧、回転寿司、研修員が自国を紹介する「お国自慢大会」、皇居や上野公園の散策、アメ横・秋葉原電気街・フリーマーケットでの買い物、フットサル大会とその後の居酒屋での飲み会、銭湯体験、鎌倉観光では9月中旬の荒れる鎌倉の海に飛び込みました。禅体験、大相撲観戦、新大久保での韓国料理ツアーやフクロウカフェ、事ある毎に開かれるパーティー・・・睡眠時間を片手でも余裕に数えられるくらいにまで削って、私たち日本人研修員は、「日本を知ってもらおう。」とか「海外研修員に楽しんでもらいたい。」という気持ちから様々な企画を催していました。しかし、いつの間にか、私たち自身が心の底から楽しんでいました。それは決して感謝を忘れない海外研修員の皆が、飛び切りの笑顔で「ありがとう。」と言ってくれたからであり、「お世話をしている」はずの私たちを幸せな気持ちにしてくれたからでした。その気持ちが「お世話をしている」や「楽しんでもらおう」ではなく、「一緒に楽しもう」という気持ちにさせてくれました。海外研修員の方々は、よく「なんで日本人研修員はこんなに色々私たちにしてくれるんだ。」と質問してくれました。その質問に対し、私が「あなたたちが嬉しいと、私たちはもっと嬉しい。私たちが色々しているのではなく、あなたたちが私たちを動かしてくれる。

楽しい気持ちにさせてくれる。私たちこそ『ありがとう』と言いたい。」と答えると、きっと私の下手な英語では気持ちを伝えられていないにもかかわらず、最高の笑顔を添えて、時に涙をいっぱい溜めながら、強く握手をしてくれました。そして私たち研修員が伸び伸びと余暇を過ごしている陰にはいつも、アジ研、JICAを始めとする教官、スタッフの皆さまのご尽力、ご配慮があったことは言うまでもありません。

願わくば、同じ研修員メンバーでもう一度研修を受けたい。

叶うはずありませんが、そう強く心から思う程の素晴らしい仲間に出会えたこと、同じ時・気持ちを共有できたことは、何よりの財産であり、人生における輝きであり、私の誇りです。そして、今後の研修員の皆さまが同じような気持ちを持てることを願ってやみません。

私は、英語が苦手なばかりでなく、日本語も存分には使えません。感謝感激、恐悦至極。皆で合唱した歌とともに、皆で踊ったダンスとともに、甘い思い出や酸っぱい思い出とともに、涙とともに、笑いとともに、私の心の奥底から、様々な感情とともに、とめどなく湧き溢れる、研修に関わった全ての人への感謝を表すのに、最適な言葉を私は持ちません。ですので、最後に大きな声で一言だけ。

ありがとうございました！